

2019 年 11 月 30 日 (土)

富山県民会館 611 号室

14:00~15:30

「富山売薬の薬—江戸時代を中心に—」

富山市売薬資料館 学芸員

兼子 心 氏

### 1. はじめに 富山売薬とは

富山売薬とは、江戸時代に富山藩が主体となって行っていた、製薬業者を取り巻く産業のことである。たくさんの薬の種類を扱っていただけでなく、薬種（薬の材料）の仕入れや他地域に薬を売りに行く流通も含まれた産業でもある。



富山市売薬資料館の資料も含めた 1,818 点の「富山の売薬用具」が、1981 (昭和 56) 年に国の重要有形民俗文化財に指定されている。

売薬資料館ではそれらを展示・保管しており、今も追加収集を行っている。国重文に指定された項目には三つあった。一つ目に富山の商売であるという地域的な特色が表されていること、二つ目に富山の人が生きるために必要な商売（生業）だったこと、三つ目に交易に関係した商売だったことである。この 3 点から、富山県の歴史を語る上で重要であるとして、指定を受けることとなった。

現在も富山は薬の生産額トップクラスの地域であり、製薬が盛んな地域として認識されている。しかし、富山で売薬が盛んになったのは、地域で薬草が採れたからだと考えている人が多い。果たして本当にそうなのだろうかということも今日は考えてみたい。

売薬業はかつて富山藩の商売として奨励され、江戸時代には自分たちで組をつくり、自治を行って、藩へ上納金を納める仕組みもつくられるなど組織立った活動が行われていた。しかし現在、売薬業者は江戸時代に比べて減少している。江戸時代の終わりには 2,300 人いたといわれているが、現在は富山県内に 1,000 人もいないかもしれない。このままでは売薬という産業自体が消えていくのではないかともいわれている。今日の機会が、自分たちが積み重ねてきた歴史の一つとして売薬を見直すきっかけになればと思っている。

### 2. 富山売薬の薬

富山売薬の薬といえば、反魂丹（はんごんたん）がその代名詞として真っ先に浮かぶのではない。しかし、江戸時代に反魂丹しかなかったわけではない。今では富山の人であっても反魂丹を知らない人が多く、実際に飲んだ人はほとんどいないのではないだろうか。配置薬や売薬といえば、富山発祥の薬ではないけれども、六神丸（ろくしんがん）や熊胆（ゆうたん）の方が今は有名かもしれない。このような状況になったのは残念だと思い、江戸時代の売薬の傾向を探るために、富山を代表する売薬商家の文書「密田家文書」を調査した。

「密田家文書」は売薬資料館で管理している。今回は 6 冊の帳面に、どのような薬や薬種が記載されているのか調べたところ、6 冊全てに記載のある薬には、万金丹（まんきん

たん) や実母散 (じつぼさん)、山田振薬などがあつた。5 冊に記載のある薬には、反魂丹をはじめ、奇応丸 (きおうがん) や感応丸 (かんのうがん) などがある。

反魂丹に比べて万金丹および上万金丹の書かれている必要量がかなり多いことから、万金丹は富山からも特に多く売られていた薬だということがうかがわれる。ただし、反魂丹には上反魂丹、本方反魂丹、延寿反魂丹など、万金丹以上に多くの種類が記載されている。例えば延寿反魂丹は、万代常閑 (まんたいじょうかん) という岡山の医師から伝わった反魂丹である。看板商品であるが故にいろいろな製法があり、品質も上から下まで幅広いのかもしれない。そのため、万金丹に比べて必要量も分散して記載された可能性がある。

反魂丹は一般に胃痛・腹痛の薬として知られているが、いろいろな効き目がある。また、人以外に牛や馬にも効くと当時の処方箋には書いてある。昔は、牛や馬はペットではなく労働力の一つであり、その生死は農家にとっても死活問題だったので、非常に大事にされていたのである。

「密田家文書」には、薬の種類や売り上げた量 (必要量) が五、ア、高、丸、サといった文字と一緒に記載されている。これは密田家の商売の範囲を示しており、それぞれ五畿内、阿波、高松、丸亀、薩摩を指している。このように密田家では商売範囲によって分担して売薬を行っていた。

文書からは、密田家は地域別に準備する薬を大体決めていたのではないかとすることも分かってきた。「五キ大奇応丸」「五キ山田ふり薬」「四国行けとく (解毒丸)」「あわ薬王」など、薬の名前に地域名が入ったものが書かれており、薬によっては処方も地域に合わせて変えている。ただし、必ずしもその地域専用というわけではなく、例外もあり、阿波や讃岐で「五キ山田ふり薬」という記載もある。中身が大きく異なるわけではないので、流用したり、余ったものを販売していたりしていたのだろう。

地域別に多く使われていた薬を並べると、各地の傾向が見られた。こうした傾向が出てくるのは面白いことである。恐らく地域別に用いられていた薬が分かるのは、密田家のリサーチの結果でもあるだろうし、傾向の把握という点で商人の力を発揮していたのだろう。このことは、密田家が商いに行っていた地域で自由に商売できたことも大きい。藩によっては、販売する薬を制限されることもあったからである。自分たちで売る薬を自由に調整できたのではないかと推測される。熊本藩では薬が原因となって地域での商売を禁止される事態も発生した。薬が商売そのものを左右する可能性があつたことから、薬の量や種類について自分たちで工夫して、規定を決めていた可能性もある。

「密田家文書」でどのような薬の種類が挙がっているかということ、五畿内では、はつさん湯、煉り薬など 50~56 種、440~560 貫匁 (約 2 トン強)、四国は阿波では 34~39 種、75~115 貫匁、高松では 15~20 種、15~50 貫匁、丸亀では 24~27 種、13~22 貫匁で、四国全体としては大体 700kg である。薩摩では山田振薬など 20~26 種、180~485 貫匁で、2 トン弱の売り上げとなっている。五畿内組は売り上げが多い分、扱う薬も多いけれども、四国は回る範囲が狭く、藩の規模も小さいので、用いる薬の種類も量も少ない傾向があつた。

当時のパッケージは袋状になっているイメージがあるが、実は 1 枚の長方形の紙で、斜めに包むのが普通だったらしい。裏には処方箋が記されていて、どのようなときに飲むといいかといった効能書きがある。例えば万金丹にもさまざまな効能が書かれていて、諸毒消し、腹痛、頭痛、目まい、立ちくらみ、酒の酔いの他、「血の道」(血の巡り) にもいいことや、牛馬だけでなく犬猫にも有効であると書かれている。また、服薬するだけでなく、毒虫刺されに対して水に溶いて付ける用法も書いてある。

また、無二膏（むにこう）という四国でよく売られていた薬は、できものやお灸の痕、排膿、あかぎれに塗る薬で、貝殻に入れて売られていた。山田振薬は、実母散と似た薬で、「産前産後、血の道、四季の引き風邪によし」と書かれており、血の巡りを良くする薬だった。濟生湯も同じような振出薬と考えられ、かなり売られていた薬の一つである。

「密田家文書」の帳面には薬の量や種類だけでなく、お土産（おまけ）についても記載されている。おまけを付ける商法は富山売薬が始めたというのはよくいわれていることだが、そもそもは顧客や藩のあいさつのための進物だった。現在の富山売薬のおまけといえは紙風船が有名だが、「密田家文書」では大量の塗り箸と箸袋の注文の記載が残っている。今回調べた 6 冊のうち 1 冊の帳面だけでも、多いもので 5 万 6000 もの箸が準備されており、それだけ顧客がいたことがうかがえる。種類は塗り箸で、わざわざ梨地や三色にしたものが用意されていた。

薬もただ販売するだけでなく、六厘入や四厘入、百玉入や五拾玉入というふうには、1 種類だけの量ではなく必要な量を工夫して販売していた。他にも、巴膏（ともえこう）という膏薬には「ヤコメ・カタメ」という富山弁の記述があった。煉薬を煮詰めるか煮詰めないかによって膏薬の硬さを変えていたという気遣いが行われていたことが読み取れる。

このように一連の冊子を読むことで、地域別の工夫や傾向、量などを知ることができたのである。富山売薬の種類が多いということは、参考本にも書いてあるので知っている人も多いかもしれないが、薬名だけでも 70 種類以上と非常に多い。また、同じ薬でも量や処方の内容を変えて、それぞれの地域に合わせた薬を準備して持ち運び、販売していたのである。江戸時代にそのようなことをしていたのだから、非常に感心させられることだと思う。

### 3. 薬種の調達

原材料となる薬種（生薬）はさらに種類が多い。しかし、その中で日本に元々あるものはそれほどない。富山の人はそのだけ多くのものを普通に準備できていたのである。例えば反魂丹の薬種や作り方は、「密田家文書」の帳面にも記載されている。それを「富山反魂丹旧記」と比較すると、「密田家文書」の処方では麝香と熊胆と龍脳が含まれていないので、やや下等の反魂丹なのかもしれないが、挙げられている薬種を見ても日本で採れないものがほとんどである。薬種名に「唐」と付いているものは輸入物であるし、乳香はオマーンで採れるといわれている。実は日本では漢方薬の材料を全く自給できておらず、現在も自給率は 1 割程度で、ほぼ輸入に頼っている。

そもそも、売薬業は富山だけで行われていたわけではない。江戸時代は近江や奈良、佐賀、岡山、山口でも一部行われていた。甲賀でも修験売薬といって、修験者が薬を販売していた。では、そういった人たちが用いていた薬種はどこから来ていたのだろうか。国内産であれ、輸入品であれ、基本的に大坂の間屋から買うのが幕府の定めた正規ルートだった。元々は道修町（どしょうまち）の 124 軒の薬種問屋が株仲間（薬種仲買仲間）として認められ、その店が卸して地域の人たちが買うというのが正しい入手法である。なぜそのように規定されていたかという、薬種を吟味しないと中身が分からないからである。薬種は誰でも区別がつくようなものではないので、扱いに慣れた、知識を持った人が吟味して、重さをきちんと量って、それに見合った値段を付けるのが仲買仲間の仕事だった。

富山の商人はもちろん正規ルートからも仕入れていたが、仕入れ先はそれだけではなく、脇店と呼ばれる仲買仲間以外の薬種商からも購入していた。道修町の記録によると、

道修町の売り上げの中で富山の商人からの売り上げは他と比べて非常に少なかった。それは正規ルート以外から買っていたからである。「密田家文書」からは、鍵屋、津高屋、河内屋といった脇店と思われる名前が見つかっている。

その他にも、仕入れのルートが幾つか見られる。一つは、富山や八尾の薬種問屋がきちんと仕入れたものを、富山の町中で買うルートである。これはごく普通の入手方法だろう。

もう一つは、加賀藩領で採れたものを売ってもらう方法である。加賀藩では、薬草を商品作物にしており、大坂や江戸へ専売品として販売することを目指していた。これは一時成功していたときもあったが、なかなかうまくいかず、幕末には消滅した。富山藩領では薬草をまとめて採れるような所はなかったが、加賀藩領の新川郡内や立山山麓、砺波の山地では薬草が生えている所があり、それを専門に採る人や農閑期に副業として採る人も存在していた。他にも熊胆や猪胆を使っていたという記録もある。また、加賀藩に限らず、他の地域に行き薬種を購入することもあったのだろう。

そして、抜荷という方法もあったといわれている。出島を通した正規の輸入ではなく、琉球や薩摩に届けられた薬種を含む唐物を積んで、日本海側を回って商売をする薩摩船がいて、その薩摩船から薬種問屋も買っていたのではないかとされている。「密田家文書」の中には、玉砂糖を買い付けて船で運搬している資料もみられる。富山の売薬商人薩摩組が北海道から昆布を仕入れ、薩摩藩で売薬商売をさせてもらうために献上していた。薩摩藩はそれを中国へ輸出する代わりに唐物を輸入して、売薬商人がその唐物（薬種）を薩摩藩から優先的に回してもらっていたのではないかとすることも以前からいわれている。もちろんこれらは正規のルートではない。1800 年代の初めごろから、幕府は唐物取引を禁止する触れを多く出しており、「密田家文書」の中にも、新潟で抜荷をしていた商人が捕らえられたという聞き書きの写しが残っている。このことから売薬商人は抜荷を扱うことに何かしら注意はしていたのではないかと考えられる。

それから、売薬商人同士でも薬種を貸し借りしていたのではないかと資料がある。正規に手に入れることはできるだろうが、買えなかったものや余っている薬種を商人同士で融通し合っていたと考えられる。密田家と油屋弥兵衛という売薬商人との貸し借りの記録を見ると、薬種の他に薬、蠟燭、蓑、紬、ギヤマン、泡盛、単衣などの日用品も含まれていた。また、泊屋与兵衛という商人との記録では、幾つかの品に「泊与注文」や、蒼朮（そうじゅつ）は「泊与へ注文」などと書いてあるので、薬種をただ買ったりするだけでなく、注文して持ってきてもらうこともあったと考えられる。もう一つ考えられることとしては、加工の依頼である。薬種はそのままでは使えないため、刻んだり炒ったりする仕事もあったので、そういった注文をしていた可能性も考えられる。このように、町の中でもそれなりに薬種の調達はできたのではないか。

ただ、ここで問題になってくるのは、薬種商ではない売薬商人が薬種を扱って大丈夫なのかということである。当時の触書を見ると、基本的に薬種は薬種商でなければ扱ってはならないこととされていた。人命に関わることなので、見分けがきちんとつく薬種商か、刻み屋（薬種の加工業者）などにしか商売株は与えられていなかった。密田家は薬種商ではなかったが、製薬はしているので薬種を扱わざるを得ず、自分たちで薬種を仕入れて商人たちで融通し合っていた。そのあたりはかなり微妙な話になるが、もしかすると薬種商たちにも手伝ってもらっていたのかもしれない。

#### 4. 薬種の研究・調査

薬種を扱い、製薬し販売することは、大なり小なり人命を左右することである。実際に売薬の薬を飲んで亡くなった事例もあったため、売薬商人も薬種や薬草の勉強はしなければならなかった。その知識の基になっているのは中国の医学書や本草学だが、日本でも医薬を扱う人たちは古くから研究をずっと続けてきたので、蓄積は多くあった。

さてこのように多くの薬種を扱っていた売薬であるが、地元で採れる薬種は把握していたのだろうか。よく挙げられるのは「延喜式」の記述で、越中国で産出される薬種は 16 種類記されている。江戸時代になると、幕府が産物を調査するようになり、その中で薬草等に関する書物もたくさん著された。加賀藩で調査された結果の一つが『加能越所産薬種考』として残されており、越中についてもどのようなものが採れていたのかかが記されている。

徳川吉宗の時代にも各地産物調査は行われ、本草学も盛んになった。輸入する薬種と銀の流出が増えたため、薬種の国産化を目指すようになった。特に注目されたのが朝鮮人参である。幕府薬草園で栽培したものは御種人参と呼ばれ、栽培を各藩に呼び掛けこの種を分け与えた。富山藩では栽培しなかったようだが、「密田家文書」の中には御種人参を使った薬の処方記述がある。

薬草の研究は、日本各地の特産物を調べることから始まっていったが、それだけではなく同じ薬種でも地域によって呼び方が異なることから、各地の方言研究にもつながっていた。本草学だけでなく言語学、名物学などの学問も、薬に関係するものとして扱わなければならなかった。そのような学問に特に熱心で、富山藩で薬種に一番詳しく人物といえば、10 代藩主の前田利保だろう。彼の著書でよく知られているのが、中国の本草書をまとめた『本草通串』という 56 冊からなる書物と、さらにそれを図版で描いた『本草通串証図』(5 冊)である。『万香園裡花壇綱目』などには、越中を調査して分かった薬草が記されている。富山藩でも採れる薬草はあったが、売薬用に利用するほどの量はなかった。しかし利保が城下に薬草を栽培させた際、売薬商人が多少関わることもあったようだ。

#### 5. おわりに

富山藩で使われていた薬の種類は多く、扱う薬種も多かった。富山の商人たちはそれらを入手して加工し、流通させていくという大変な力量を持っていたことが分かる。また、反魂丹という一つの特産物に頼り切るのではなく、多様な薬を作ることによっていろいろな局面を乗り越えていった。そのことは、我慢強い富山の人の性格にも表れていると思う。

また製薬に直接関係する薬種だけでなく、藩への献上品や土産物、貝などの入れ物類も含めた、売薬という商売を成り立たせるために準備しなければならないものを入手し、流通させることが富山売薬には必要だった。

どうして富山で売薬業が成り立ち、盛んとなったのかは最大の謎だといえるが、売薬を成立させるためには、交易と製薬と販売それぞれ全てがつながっていることが不可欠だったことが分かる。それには、売薬が発展した富山が海に面している地域だからこそで、海運という要素が大きな力となっていたことは間違いない。

海外や国内の他地域から仕入れたものを他の地域で売ることは、現在の日本でも行われていることである。そういうことを踏まえても、売薬を考えるということは今の日本を考えることにもつながるのではないかと私は思っている。